

安達が原

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、京都から諸国修行に出た坊さんが、白河の関を越えて奥州に入りました。磐城国の福島に近い安達が原という原にかかりますと、短い秋の日がとつぷり暮れました。

坊さんは一日寂しい道を歩きつづけに歩いて、おなかはずくし、のどは渇くし、何よりも足がくたびれきつて、この先歩きたくも歩かれなくなりました。どこぞに百姓家でも見つけ次第、頼んで一晩泊めてもらおうと思いましたが、折あしく原の中にかかつて、見渡す限りぼうぼうと草ばかり生い茂った秋の野末のけしきで、それらしい煙の上がる家も見えません。もうどうしようか、いつそ野宿ときめようか、それにしてもこうおなかですいてはやりきれない、せめて水でも飲ましてくれる家はないかしらと、心細く思いつづけながら、とぼとぼ歩いて行きますと、ふと向こうにちらりと明りが一つ見えました。

「やれやれ、有り難い、これで助かった。」と思つて、一生懸命明りを目当てにたど

つて行きますと、なるほど家があるにはありましたが、これはまたひどい野中の一つ家で、軒はくずれ、柱はかたむいて、家というのも名ばかりのひどいあばら家でしたから、坊さんは二度びつくりして、さすがにすぐとは中へ入りかねていました。

すると中では、かすかな破れ行灯の火かけで、一人のおばあさんがしきりと糸を繰っている様子でしたが、その時障子の破れからやせた顔を出して、

「もしもし、お坊さま、そこに何をしておいでだえ。」

と声をかけました。

出し抜けに呼びかけられたので、坊さんは思わずとしながら、

「ああ、おばあさん。じつはこの原の中で日が暮れたので、泊る家がなくて困っている者です。今夜一晩どうかして泊めては頂けますまいか。」

といいました。

するとおばあさんは、

「おやおや、それはお困りだろう。だがごらんのとおり原中の一軒家で、せつかくお泊め申しても、着てねる布団一枚ありませんよ。」

とことわりました。

坊さんはおばあさんがそういう様子の親切そうなのに、やっと安心して、

「いえいえ、雨露さえしのげばけっこうです。布団なんぞの心配はいりませんから、

どうぞお泊めなすつて下さい。」

と頼みました。

おばあさんはにこにこ笑いながら、

「まあまあ、そういうわけなら、御不自由でも今夜は家に上がってゆつくり休んでおいでなさい。」

といつて、坊さんを上へ上げてくれました。

坊さんは度々お礼をいいながら、わらじをぬいで上へ上がりました。おばあさんは、囲炉裏にまきをくべて、暖かくしてくれたり、おかゆを炊いてお夕飯を食べさせてくれたり、いろいろ親切にもてなしてくれました。それで坊さんも、見かけによらないこれはいいい家に泊り合わせたと、すっかり安心して、くり返しくり返しおばあさんにお礼をいっていました。

お夕飯がすむと、坊さんは炉端に座つて、たき火にあたりながら、いろいろ旅の話をしますと、おばあさんはいちいちうなずいて聞きながら、せつせと糸車を回していま

した。そのうちだんだん夜が更けるに従つて、たださえあばら家のことですから、外の冷たい風が遠慮なく方々から入り込んで、しんしんと夜寒が身にしみます。けれどあいにくなことには、炉の方の火がだんだん心細くなつて、ありつたけのまきはとうに燃やしつくしてしまいました。

おばあさんはふと坊さんの寒そうにふるえているのを見つけて、

「おやおや、まきがみんなになりましたか。お客さまがあると知ったらもつとたくさん取つておけばよかつたものを、気のつかないことをしました。どれどれ、ちよつと裏の山へ行つてまきを取つて来ますから、お坊さま、しばらく退屈でもお留守番をお頼み申します。」

こういつておばあさんは気軽に出て行こうとしました。

すると坊さんはいそがしい毒がつて、

「いやいや、この夜更けにそんな御苦労をかけてはすみません。何ならわたしが一走り行つて取つて来ましょう。」

といいますと、おばあさんは手をふつて、

「どうして、とんでもない。旅の人に分かるものではない。まあまあ、何にもごちそうの

ない一つ家のことだから、せめてたき火でもごちそうのうちだと思つてもらいましょう。」
 といいいい出かけて行きましたが、何と思つたのか戻つて来て、

「その代わりお坊さま、しっかり頼んでおきますがね、わたしが帰つてくるまで、あなたはそこにじつと座つていて、どこへも動かないで下さいよ。うっかり動いて、次の間をのぞいたりなんぞしてはいけませんよ。」

とくり返し、くり返し、念を押しました。

「どういうわけだか知らないが、むろん用もないのに、人の家の中なんぞをかつてにのぞいたりなんぞしませんから、安心して下さい。」

と坊さんもいいました。

それでおばあさんも安心したらしく、そのまま出ていきました。

二

さておばあさんが出て行つてしまうと、坊さんはただ一人、しばらくはつくねんと炉端に座つたままおばあさんの帰りを待つていましたが、じき帰ると思つたおばあさんはなか

なか帰^{かえ}つて来^きません。何^{なに}しろ西^{にし}も東^{ひがし}も分^わからない原^{はら}中^{なか}の一軒^{けん}家^やに一人^{ひとり}ぼっちと残^{のこ}されたのですから、心^{こころ}細^{ほそ}さも心^{こころ}細^{ほそ}いし、だんだん心^{しん}配^{はい}になつてきました。何^{なん}でも安^あ達^{だち}が原^{はら}の黒塚^{くろづか}には鬼^{おに}が住^すんでいて人^{ひと}を取^とつて食^くうそうだなどという、旅^{たび}の間^{あいだ}にふと小耳^{こみみ}にはさんだうわさを急^{きゆう}に思^{おも}ひ出^だすと、体^{からだ}中^{じゆう}の毛穴^{けあな}がぞつと一時^じに立^たつように思^{おも}いました。そういえばこんな寂^{さび}しい原^{はら}中^{なか}におばあさんが一人^{ひとり}住^すんでいるというのもおかしいし、さつき出^でがけに、妙^{みよう}なことをいつて度々^{たびたび}念^{ねん}を押^おして行^いつたが、もしやこの家^{うち}が鬼^{おに}のすみかなのではないかしらん。いつたい「見^みるな。」といった次^{つぎ}の間^まには何^{なに}があるのか知らん。こう思^{おも}うと、こわさはこわいし、氣^きにはなるし、だんだんじつとして辛抱^{しんぼう}していられなくなりしました。それでもあれほど固^{かた}く「見^みるな。」といわれたものを見^みては、なおさらどんな災難^{さいなん}があるかもしれませぬ。

坊^{ぼう}さんはしばらく見^みようか、見^みまいか、立^たつたり座^{すわ}つたり迷^{まよ}つていましたが、おばあさんはやつぱり帰^{かえ}つて来^こないので、とうとう思^{おも}ひきつて、そつと立^たつて行^いつて、次^{つぎ}の間^まのふすまをあけました。

すると坊^{ぼう}さんは驚^{おどろ}いたの、驚^{おどろ}かないのではありません。あけるといっしよに中^{ちゅう}からぷんと血^ちなまぐさいにおいが立^たつて、人^{にん}間^{げん}の死骸^{しかい}らしいものが天^{てん}井^{じよう}まで高^{たか}く積^つみ重^{かさ}ねて

ありました。そしてくずれてどろどろになった肉が血といっしょに流れ出してました。
 坊さんは「あつ。」といったなり、しばらく腰を抜かして目ばかり白黒させたまま起き上がることもできませんでした。そのうちふと気がつく、これこそ話にきいた一つ家の鬼だ、ぐずぐずしているとんでもないことになると思つて、あわててわらじのひもを結ぶひまもなく逃げ出そうとしました。けれども今にもうしろから鬼婆に襟首をつかまれそんな気がして、氣ばかりわくわくして、腰がわなわなふるえるので、足が一方向に進みません。それでもころんだり、起きたり、めくらめつぽうに原の中を駆け出して行きますと、ものの五六町も行かないうちに、暗やみの中で、

「おうい、おうい。」

と呼ぶ声がしました。

その声を聞くと、坊さんは、さてこそ鬼婆が追っかけて来たどがたがたふるえながら、耳をふさいでどンドン駆け出して行きました。そして心の中で悪鬼除けの呪文を一生懸命唱えていました。そのうち、

「おうい待て、おうい待て。」

と呼ぶ鬼婆の声がずんずん近くなつて、やがておこった声で、

「やい、坊主め、あれほど見るなといった部屋をなぜ見たのだ。逃げたつて逃がしはしないぞ。」

というのが、手にとるように聞こえるので、坊さんはもういよいよ絶体絶命とかくごをきめて、一心にお経を唱えながら、走れるだけ走つて行きました。

すると、お経の功德でしょうか、もうそろそろ夜が明けかけてきたので、鬼もこわくなつたのでしょうか、鬼の足がだんだんのろくなつて、もうよほど間が遠くなりました。

そのうちずんずん空は明るくなつてきて、東の空が薄赤く染まってくると、どこかの村で鶏の鳴き立てる声がいさましく聞こえました。

もう夜が明けてしまえばしめたものです。鬼は真昼の光にあつてはいくじのないものですから、うらめしそうに、しばらくは、旅僧のうしろ姿を遠くからながめていましたが、ふいと姿が消えて見えなくなりました。

坊さんはそのうち人里に出て、ほつと一息つきました。そして花やかにさし昇つた朝日に向かつて手を合わせました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

安達が原

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>